

絵本の中の子どもの暮らし

—第1期（1908年～1923年）の金井信生堂の絵本に見る—

大橋 真由美 （大阪国際児童文学館研究生）

【はじめに】

子どもの暮らしには、その時代の社会の動きが濃厚に反映している。例えば、現代の子どもの遊びの場で使用されるハイテク玩具は、おとなの社会で日常的に使用される「もの」の雛型、あるいは、「もの」の同型であるように、その時代の社会と密接な関係を持つ。

このように、「もの」である玩具を調査することは、子どもの遊びと社会との関係を研究する、一つの有効な方法である。しかし、子どもの暮らしの全体像は、遊びだけではとらえられない。子どもの暮らしには、「働き・学び・遊び」などの複数の側面がある。

子どもの周辺にある「もの」の一つである絵本は、古くは紙に印刷された玩具の認識もあるが、視覚的な要素を持つ本である。この絵本には、主な読者が子どもであるがゆえに、子どもの暮らしが数多く描かれている。

そこで、本研究は、絵本の中の子どもの暮らしを、社会の変遷の中で調査検討しようと試みるものである。本稿では、明治末から大正に発行された、金井信生堂の絵本を用い、絵本の中の子どもの暮らしを調査する。

【第1期の金井信生堂の絵本】

金井信生堂の絵本を調査した結果¹⁾、現存する明治41(1908)年3月初版発行の『曾我兄弟』から、大正11(1922)年11月初版発行の『昔斬金太郎』までの、107冊を、第1期(1908年～1923年)の金井信生堂の絵本とする。本稿では、第1期の絵本の内、子どもの暮らしを描いた、次の20冊を調査対象とする。

- (a)『新女礼式』 明治42(1909)年1月 雛(以下同じ)
- (b)『軍国少年』 明治43(1910)年11月
- (c)『感心ナ兄妹』 大正2(1913)年1月
- (d)『春から』 大正2(1913)年3月
- (e)『少女十二カ月』 大正4(1915)年1月
- (f)『コドモト動物』 大正5(1916)年1月
- (g)『チンチロリン』 大正5(1916)年1月
- (h)『学べ遊べ』 大正5(1916)年1月
- (i)『フレンド』 大正6(1917)年1月
- (j)『四季』 大正6(1917)年2月
- (k)『ツボミ』 大正6(1917)年3月
- (l)『キングトーイス』 不明
- (m)『海ト山』 大正7(1918)年6月
- (n)『少女ノ友』 大正8(1919)年1月

(o)『コドモト海』 大正8(1919)年4月

(p)『あそび』 大正9(1920)年3月

(q)『太郎サント花子』 大正9(1920)年9月

(r)『歌』 大正10(1921)年1月

(s)『ネコアソビ』 大正10(1921)年1月

(t)『学べ遊べ』 大正10(1921)年2月

これらは、例外もあるが、12場面からなる各場面に内容に沿った見出しがつく。そこで、(a)～(t)「書名」・場面番号①～⑫・「見出し」を提示し、絵本の中の子どもの暮らしを、「働き・学び・遊び」の順に検討する。

【絵本の中の子どもの働き】

(a)『新女礼式』の①「年礼」で、女学生風の少女は、日頃世話になっている家に進物を持たせた車夫を伴い年始の訪問をする。④「床飾」で、女学生風の姉と肩上げのある着物を着た妹が、床の間の掛け軸を来客に合わせて自分達で選んで飾る。

(c)『感心ナ兄妹』の①「看病」で、兄妹は、父親のいない家庭で母親の看病をする。兄は、②「納豆売」で、納豆を行商し、④「苦学」で、新聞を売る。妹は、③「花売」で、花を売り、⑦「入院」で、子守りをする。

苦学の少年は、(c)同様に、(g)『チンチロリン』の③「苦学生」、(q)『太郎サント花子』の⑧「夕刊」で、新聞を売る。子守りの少女は、(d)『春から』の⑩「花見」、(m)『海ト山』の④「急行列車」、(n)『少女ノ友』の④「オ花見」⑧「氏神」で、ねんねこに鉢巻き姿で赤ん坊を背負う。

(h)『学べ遊べ』の⑩「親切」で、姉は、弟妹の勉強を見て、(j)『四季』の④で、兄は、川遊びで妹を背負う。子ども達は、(i)『フレンド』の⑨で、兎狩りを、(k)『ツボミ』の⑧「花壇」で、花の水やりを、(m)『海ト山』の⑩「収穫」で、田植えをする。(t)『学べ遊べ』の⑩「オ手伝」で、少年は、通帳持参でお使いに、少女は、タライで洗濯をする。

幼い子どももそれなりに働いて、(a)『新女礼式』の⑩「生花」で、弟は、姉の生花の邪魔をする妹をいさめ、(q)『チンチロリン』の⑧「電話」で、妹は、壁にかかった受話器を取ろうとし、兄は、電話の着信を母に報せる。

【絵本の中の子どもの学び】

(h)『学べ遊べ』の①「熱心」で、子ども達は、おしゃれをして楽しそうに登校する。二人の少年は、②「罰」で、少年だけの授業中に悪戯をして立たされる。少女達は、④「裁縫」で、少女だけで裁縫を学ぶ。少年少女は、⑤

「手工」で、共に仲良く土をこねる。

子ども達は学ぶことに熱心で、(h)「学べ遊べ」の⑩「親切」で、弟妹は姉と、(c)「感心ナ兄弟」の⑧「復習」で、坊っちゃん達は書生と、(t)「学べ遊べ」の⑤「復習」で、お兄さんは机に頬杖ついて、学校の復習を家庭でする。

幼い子どもは、家庭では、(d)「春から」の⑦「影絵」で、お姉さんの手影絵を真似て手をかざし、幼稚園では、(h)「学べ遊べ」の⑩「遊戯」で、遊戯を踊り、(r)「歌」の④「幼稚園」で、歌を唄う。

子ども達は、(a)「新女礼式」の⑦「作法ノ稽古」で、煎茶作法を、(g)「チンチロリン」の⑦「オ客」で、手本を示す姉の後で来客への挨拶の仕方を、(g)の⑫「自転車」で、道路を走る自転車に対する交通指導を、(n)「少女ノ友」の⑩「和歌」で、姉さん達の会に同席して和歌を、(t)「学べ遊べ」の④「人形の着物」で、母親の指導で人形の着物の縫い方など、いろんなことを学ぶ。

【絵本の中の子どもの遊び】

(b)「軍国少年」の①「宣戦」で、少年達は、南軍と北軍に分かれて戦ごっこを始める。誰もが大将になりたがり、②「騎兵」で、年上の少年が司令官に選ばれる。南軍北軍は、裏山で④「衝突」し、⑤「飛行機の競争」も繰り広げ、⑥「接戦」する。⑨「突撃」により負傷者もでて、赤十字の⑩「衛兵隊」が両軍を介抱する。犬は、②「騎兵」で、最先を、⑥「接戦」で、援兵を乗せ、⑧「審判官」の横に立ち、秋に始まり冬まで持ち越した⑪「雪合戦」で、戦果を見守る。山羊は、③「砲兵」で、砲車を乗せた乳母車を引く。激しい戦いの後、少女も交えた講和の印の⑫「平和会」で、南軍の大將は、「勝てば官軍」を唄い、北軍の大將は、剣舞を舞う。

少年達は、(b)同様に、(h)「学べ遊べ」の⑫「喇叭の音」、(p)「あそび」の⑥「森の兵隊」、(q)「太郎サント花子」の⑩「連隊長」、(r)「歌」の③「兵隊」など、何人か集まると、戦ごっこを始める。時には、少女達も、(n)「少女ノ友」の「戦ゴッコ」のように、赤十字の看護婦として加わる。

少女達は、(a)「新女礼式」の③「桃の節句」、(d)「春から」の⑨「節句」、(e)「少女十二ヵ月」の③で、リボンを飾り振り袖を着て白酒で節句を祝う。(d)「春から」の⑫「摘草」で、草を摘み、(e)「少女十二ヵ月」で、四季折々の自然を愛で、(n)「少女ノ友」の①「オ正月」で、羽根つきをする。

子ども達は、(d)「春から」の①「福引」、(t)「学べ遊べ」の⑫「暖力」で、おじいさんと、(q)「太郎サント花子」の⑨「鳩ポッポ」で、おばあさんと遊ぶ。(f)「コドモト動物」、(j)「四季」の⑪、(m)「海ト山」の⑫「兎狩」で、動物と遊ぶ。(i)「フレンド」の④、(k)「ツボミ」の④「緋鯉」、(m)「海ト山」の⑦「魚釣」⑧「緋鯉」、(o)「コドモト海」、(q)「太郎サント

花子」の④「春ノ河」で、魚と遊ぶ。(g)「チンチロリン」の①「松虫鈴虫」、(i)「フレンド」の②、(p)「あそび」の③「蝶」で、虫と遊ぶ。(f)「コドモト動物」の⑧「猫」、(g)「チンチロリン」の④「猫」、(p)「あそび」の①「帽子」、(r)「歌」の①「ピアノ」、(s)「ネコアソビ」で、猫と遊ぶ。(d)「春から」の⑦「影絵」、(p)「あそび」の⑫「公園」、(s)「ネコアソビ」の⑫「映シ絵」で、影と遊ぶ。

子ども達は、(d)「春から」の②「羽根突」③「歌留多」④「風揚」⑧「竹馬」、(g)「チンチロリン」の⑪「折鶴ト人形」、(k)「ツボミ」の⑤「達磨」⑥「張子ノ虎」、(l)「キングトイース」の①「キュウパイ」、(q)「太郎サント花子」の⑪「木馬」、(r)「歌」の⑪「飛行船」など、いろんな玩具で遊ぶ。

子ども達は、(h)「学べ遊べ」の⑦「景色」で、逆立ちを、(i)「フレンド」の⑤で、将棋を、(j)「四季」の②で、なわとびを、(k)「ツボミ」の⑫「電車」で、電車ごっこを、(m)「海ト山」の③「飛行競技」で、グライダー飛ばしを、(p)「あそび」の⑧「角力」で、相撲を、(r)「歌」の⑫「落葉」で、かくれんぼを、(t)「学べ遊べ」の⑩「ベースボール」で、野球を、(t)の⑦「オ話」で、火ばちを囲んでお話をする。

(h)「学べ遊べ」の①「熱心」⑥「日曜」、(k)「ツボミ」の⑤「達磨」、(o)「コドモト海」の表紙、(p)「あそび」の⑩「噴水」、(s)「ネコアソビ」の⑩「悪戯」には、絵本が描かれる。(n)「少女ノ友」の①「オ正月」で、店の入口に、⑤「夜店」で、街路の電柱に、「信生堂」の看板がかけられる。

【おわりに】

第1期の金井信生堂の絵本が発行されたのは、教育が整備され、富国强兵の国策の下に、近代国家が構築されて、日本が第一次世界大戦に参戦した時代である。

これらの絵本の中で、子ども達は、率先して働き、いろんなことを学び、どこでも誰とでも仲良く遊ぶ。子ども達は、一人前の判断を任せられ、家庭や社会に関わりを持ち、常に誰かと一緒に、一人ぼっちの子どもはいない。そのような子どもを、良い子どもとする。

そこに描かれるのは、「もの」だけではない「ひと」との関わりであり、その中での子どもの暮らしである。そして、まだ豊かな自然の残る都市に暮す中流以上の家庭の子どもの暮らしである。苦学生や子守娘の暮らしも、「ひと」との関わりの中で、上昇思考に描かれる。

これらの絵本の流通網は、北は北海道、南は九州、中国・大連にまでおよぶ。これらの絵本には、省略や誇張があるとしても、当時の社会の要求が反映しているであろう。その社会状況の下、これらの絵本は、都市に暮す中流以上の家庭の子どもの暮らしを地方に伝達する、メディアとしての役割を担うものでもある。

注1) 大崎真由美1998「金井信生堂・絵本目録(1)」『国際児童文学館記要 第十三号』